

前半は藤嶋さんからの報告、後半は出前授業の準備を行いました。

「天心を総括してみる」

報告者：藤嶋俊會

岡倉天心(覚三)ゆかりの五浦海岸と新潟県妙高市赤倉の両方の地を訪れる機会があったので、東京美術学校非職後の岡倉天心(覚三)が、どのような戦略と展望をもって五浦と赤倉を考えていたかを考察してみた。

五浦は地形上太平洋に向って開いており、海の彼方に広がるアメリカや中国、インドとの情報交換を可能にする交信基地として、また国内的には辺境に引き下りながらも中央に対して巻き返しを図る戦略基地として位置づけられる。しかも岡倉は、この基地の地形を、文明の先進国である欧米に対して、中国・インド・日本のハイブリッド空間として捉え（小泉晋弥）、東洋文化圏の優位性を意識している。それに対して赤倉は、地形的には懐深い山岳として閉じた構造をしており、五浦とは対照的だが、父母の地を福井に持つ覚三にとっては、いずれは“帰還すべき”場所だった。

五浦では“五浦釣徒”と称して文人風を装いながら、実際はボストン美術館の公務を勤勉にこなすべく、日本と中国、インドの古美術品の整理と収蔵に励んでおり、覚三の仕事は着々と成果を上げていた。だが心に修羅を抱えた覚三は、最後の1年、オペラ台本『白狐』の制作と、インドで出会ったプリヤンバダとの告白的な文通を通して、現世からの救いを得ようとした。死期を感じて赤倉に向い、最後の手紙を赤倉から出したのは、刀折れ矢尽きた自身の身体を休める場所が必要だったからである。



「出前授業（クイズと解説集）」の報告と進め方



前回の例会では、皆が考えてきたクイズを集めました。それらを廣島さんがとりまとめたところ、クイズは6つのテーマに分類されました。

まずは、問題文を修正したり、新しいクイズを追加したりする作業を進めました。今回は3つの班に分かれて、各班がクイズを2テーマずつ分担します。内海先生からは、単に固有名詞を知っているかどうかではなく、その時代や出来事の本質を問うようにと指導がありました。

今後は、クイズ毎に解答解説を作成し、各班がクイズの最終案を取りまとめます。